

# 中間構文と能格構文に関する分析

---

水 野 江依子

---

## 0. 序 論

本稿では、(1 b)、(1 c)で示した英語の能格構文、中間構文について、ゼロ派生接辞を用いた分析を行なう。<sup>1</sup>

- (1) a. John broke *this cup*.  
 b. *This cup* broke. (Ergative)  
 c. *This cup* breaks easily. (Middle)

能格構文も中間構文も、その主語は対応する他動詞構文(1 a)の目的語と同じ名詞句を取る。これらの構文に対しては様々な研究がなされているが、おおまかには二つの立場に分かれている。一つは、(1 b-c)の主語は元々目的語の位置にあるが、中間構文ではその目的語が、統語論において主語位置へ移動し、能格構文では語彙部門において主語位置へ移動する、という分析(cf. Keyser and Roeper (1984))であり、もう一つは、両者共、語彙部門において規則が適用され、統語論には一般的な自動詞と同様、主語位置に主語が投射されるという分析である (cf. Fagan (1988))。

本稿では、どちらの立場もとらず、中間構文、能動構文は、受動文と同様、その文法上の主語は全て可視統語論における目的語の移動によるものであるという立場をとる。また、両者の構文の持つ様々な特徴をゼロ派生接辞を用いて説明する。具体的には、次のことを主張する：

- (2) 中間動詞や能格動詞は、それぞれ異なったゼロ派生接辞が付着してい

る複合語であり、このゼロ派生接辞のもつ素性が中間構文と能格構文の特性を決定する。

本稿の構成は以下のとおりである。1節では、中間構文と能格構文の示す統語的な振る舞いの差は、自動詞性と他動詞性の違いによるものではなく、両者の動詞の持つ状態性と出来事性の違いによるものであることを示す。2節では、Fujita (1993) の分析を取り上げる。Fujita は本稿と同様、中間構文、能格構文の文法上の主語は、可視統語論における目的語の移動によるものであるという立場をとっているが、その具体的な分析には問題があることを指摘する。3節では、ゼロ派生接辞を用いた具体的な分析を示す。4節は品詞転換におけるゼロ派生接辞との関わりを論じる。5節は結語である。一部 Chomsky (1995) に言及する箇所もあるが、基本的には Chomsky (1993) の枠組みをとる。

## 1. 能格構文と中間構文の特性

能格構文と中間構文には、様々な統語上の振る舞いの違いがある。Keyser and Roeper (1984) は、両者の違いは、前者が自動詞の特性を持ち（文法上の主語は通常の自動詞同様、主語位置へ投射されているというもの）、後者が他動詞の特性を持つこと（文法上の主語は論理上の目的語であり、可視統語論においてそれが移動したというもの）に起因するのだと主張している。本稿では、彼らの分析は両者の違いを正しくとらえたものではないとする Fagan (1988) に従い、中間構文と能格構文の本質に対する一つの結論を導きだす。

Keyser and Roeper (1984) は、自動詞から他動詞を作ることができる接頭辞 *out-* に関する観察を行なっている。接頭辞 *out-* は (3) で示したように、能格動詞に付与することはできるが、(4) で示したように、中間動詞に付与することはできない。

- (3) a. The basketball outbounced the baseball.  
 b. Christmas bells outjangled church bells this year.

(Keyser and Roeper 1984 : 393)

- (4) a. \*Trees outplant flowers easily.

- b. \*Bureaucrats outbribe managers easily. (ibid. : 395)

彼らはこの事実は、能格動詞が自動詞の特性を持つものに対し、中間動詞は、他動詞の性格を持っている事を示すものであるとしている。しかし、Fagan(1988)によればこれは正しい結論ではない。この out 接辞は、自動詞であってもそれが状態動詞であれば付与できないという特性がある。

- (5) a. \*John outbelieves everyone.

(Roberts 1985, cited in Fagan 1988)

- b. \*His advice outmattered ours. (Fagan 1988 : 191)

すなわち、(3)と(4)の文法性の対比は、能格動詞が自動詞であり、中間動詞が他動詞であるからではなく、後者が状態動詞と同様の特性を持ち、前者が出来事動詞と同様の特性を持つためである、と反論している。

同様の主張と反論が、away との共起に関する事実についてもなされている。away は、(6)で示したように、自動詞と共起して「～し続ける」という意味の構文をつくることができるが、(7)で示したように、中間動詞とは共起できない。このことは、中間動詞が他動詞の性質を持つことを示すものだと Keyser and Roeper は主張している。

- (6) a. The dial is spinning away.

- b. John is hitting away at Bill. (Fagan 1988 : 189)

- (7) a. \*The bureaucrats bribe away easily.

- b. \*The chickens kill away easily.

(Keyser and Roeper 1984 : 392)

これに対して Fagan は、(8)で示したように、away は状態動詞とも共起することができないということを指摘し、(7)の非文法性は、それが状態動詞と同様の性質を持っている事を示すものだとしている。

- (8) a. \*He stank away.

- b. \*She belonged away. (Fagan 1988 : 190)

中間動詞が状態動詞の性質を持ち、能格動詞が出来事動詞の性質を持つ、という点は、両者の動詞の本質を捉える上で、非常に重要であるように思われる。というのは、この観点は自動詞性と他動詞性の観点では扱うことのできない中

間構文と能格構文に関するより広い言語事実（相違点）を扱えるからだ。例えば、よく知られているように、中間動詞は、(9)(10)で示したように命令文や進行形の構造に現れることができないが、(11)(12)で示したように能格動詞は現れることができる。

(9) \*Bribe easily, bureaucrat !

(10) \*Bureaucrats are bribing easily.

(11) Sink boat !

(12) The boat is sinking. ((9)-(12) Keyser and Roeper 1984 : 385)

この相違を自動詞性と他動詞性という観点で説明することはできない。但し状態動詞も、(13)(14)で示したように進行形や命令文をとれないといった事実から、中間動詞が状態動詞の性質を持ち、能格動詞が出来事動詞の性質を持っていると考えれば、容易に説明がつく。

(13) \*Know the answer, John !

(14) \*John is knowing the answer. (Ibid.)

さらに、(15)で示したように、中間動詞が特定の出来事を指し示す要素とは共起できないのに対し、(16)で示したように、能格動詞は共起できる。これも、後者が出来事を述べる動詞であるが、中間動詞はそうでないことを示す一つの証拠となる。<sup>2</sup>

(15) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.

b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

(Keyser and Roeper 1984 : 384)

(16) a. The boat sank in a matter of minutes.

b. The door closed behind him. (Fagan 1988 : 181)

以上の点から、能格動詞と中間動詞に関して次のようにいえるであろう。

(17) 中間動詞は、状態性を表す動詞であり、能格動詞は出来事性を表す動詞である。両者の様々な統語的相違はそこから派生される二次の結果である。

本稿では、この状態性と出来事性が両者の動詞の持つ本質であると考え、これ



(20 b)の中間動詞 *breaks* は、[+EN] 素性を照合するために V 2 を経由し、*v* まで繰り上がる。主格目的語 (*this cup*) は、[Spec, VP 2]、[Spec, *v*P]、[Spec, TP]を経由し、[Spec, AgrS']へと移動する。その際、[Spec, VP 1]を飛ばして移動することができる。<sup>3</sup> なぜならば、動詞が V 1 から *v* へと繰り上がるため、[Spec, VP 1] と [Spec, *v*P] は等距離になるからである。

一方、(21 b)の能格構文では、動詞が V 2 から *v* へと繰り上がるため、[Spec, VP 2] と [Spec, *v*P] が等距離になる。故に、主格目的語は [Spec, VP 2] を飛ばして移動することができる。

この派生の相違が(これは、*v*P の位置が両構文で異なっていることから生じるものである)が、中間構文と能格構文の暗黙項 (implicit argument) の特性の違いを説明できるとしている。前者の潜在項は常に動作主項として解釈されるが、後者の潜在項は使役項として解釈される。これは、主格目的語移動の際に利用されない位置の違いによるものであると Fujita は、主張している。<sup>4</sup> 中間構文では動作主項の位置である [Spec, VP 1] 位置が目的語移動の際に利用されていない。能格構文では、使役項の位置である [Spec, VP 2] 位置が利用されていない。Fujita によれば、その位置が潜在的な外項として利用され、故に中間構文では潜在項が常に動作主として解釈され、能格構文の潜在項は使役項として解釈される。

しかし、彼の分析には問題がある。まず第一に、機能範疇 *v*P の現れる位置が中間構文と能格構文で変動するという点である。機能範疇の位置が変動するという分析には問題がある。もし、これが正しいとすれば、AgrS、AgrO、T も機能範疇であるのだから、これらの現れる位置も変動できるはずであり、(22 a)は何の問題もなく派生を収束するはずである。

- (22) a. [<sub>AgrO</sub> [<sub>VP1</sub> subj<sub>(ACC)</sub> [<sub>AgrS'</sub> [<sub>T</sub> [<sub>VP2</sub> [<sub>v'</sub> V obj<sub>(NOM)</sub>]]]]]]]]  
 b. \*John<sub>(ACC)</sub> Mary<sub>(NOM)</sub> loved.

しかし、その派生形である (22 b) は明らかに非文である。*v*P だけ変動可能な特別な機能範疇とするのは規定となる。故に、この分析には問題がある。

第二に、 $\theta$  役に特定の位置を設定しているという点である。もし、 $\theta$  役に対応

する構造的位置があるとするならば、他の  $\theta$  役に関しても設定する必要が生じてくるであろうし、そうなれば、構造が非常に複雑になることは免れえない。そのようなことは、概念的に不適切であるように思われる。例え主語に関する  $\theta$  役にのみ限定したとしても、(23)で挙げたように様々な  $\theta$  役が存在する。

- (23) a. *John* ran toward the house. (Theme)  
 b. *John* likes apples. (Experiencer)  
 c. *Harriet* bought a pig from *Zelda* for \$5.98. (Source or Goal)

したがって、構造の複雑化という結果を免れることはできず、問題となろう。

### 3. 中間動詞と能格動詞のゼロ派生接辞

#### 3.1 中間動詞のゼロ派生接辞を用いた分析

1 節で、中間動詞（構文）の真の特性は状態性を表すものであり、その統語的振る舞いはそこから生じるものであるということを見た。ここで、この中間動詞の状態性は、動詞にゼロ派生接辞が付加されることによって得られるものであると仮定する。つまり、このゼロ派生接辞のもつ意味素性によって、中間動詞が表す意味素性が決定されると仮定する。ここでは便宜上、そのゼロ形態接辞を  $\phi_{\text{stative}}$  と表すことにし、(24)を提案する。

- (24) 中間動詞は、動詞にゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  がついた複合語(e. g. break- $\phi_{\text{stative}}$ )であり、そのゼロ派生接辞の担う意味特性によって、中間構文の様々な特性が導き出される。

ゼロ派生接辞はどんな動詞についてもよい。但し、後で示すが、他の理由で排除される。

議論を進めていく前に、(24)の仮説の妥当性について述べておく。まず、派生接辞がそれ自身意味特性を持っている、という主張に関しては、Roeper (1984: 271)を参照してほしい。彼は、接尾辞(e. g. -able, -ful)は、独自の  $\theta$  格子 ( $\theta$ -grid) を持つと主張しており、その  $\theta$  格子が名詞化の際に重要な役割を果たすといっている。

第二に、派生接辞が付加することによって何らかの意味的变化を与える、と

いう主張の妥当性について述べる。agitate、annoy、amuseのような動詞は、名詞化接辞を加えることによって意味的变化が生じる、という観察がなされている (cf. Pesetsky (1995 : 72)、Iwata (1995))。

(25) agitation, annoyance, amusement

即ち、(25)で示したような名詞化された語は、その状態や過程をあらわすものであり、その動詞の本来持っていた使役的意味を持たなくなるという意味的变化が起こっている。このような点からも、派生接辞がその付加される語に対して、何らかの意味的变化を与えると考えることは妥当であろう。そして、この主張はゼロ派生接辞にも拡張される。例えば、使役的意味を持つ動詞 surprise (驚かす)は、名詞化される事によって、表層上の形式には変化が見られないが、その使役的意味はなくなる。先に見た agitationのような例と合わせて考えれば、名詞 surprise は、何らかの空の接辞が付加されたものであると考えれば説明がつく。以上の点から、派生接辞が付くことによって (それが顕在的な接辞であれ、空の接辞であれ) 意味的变化が起こると考えることは妥当であり、(24)で主張したように、ある動詞に派生接辞がつくことによってその動詞が状態性を表す動詞に変化すると考えることは適切であるように思われる。<sup>5</sup>

さらに(24)で提案したように、中間動詞がゼロ派生接辞のついた複合語であることを支持する証拠を挙げる。Pesetsky (1995) は、(26)の中間動詞の名詞化されたものが非文になるのは、Myersの一般化(27)に反するためであって、ゼロ派生接辞の存在を証明するものであると主張している。

(26) a. \*the bureaucrats' easy bribery

b. \*the book's easy translation (Pesetsky 1995 : 261)

(27) Myers's Generalization

Zero-derived words do not permit the affixation of further derivational morphemes. (Myers 1984, cited in Pesetsky 1995 : 75)

すなわち、中間動詞は(28)で示したようにゼロ派生接辞がついているので、さらに派生形態素をつけることはできないのである。<sup>6</sup>

(28) a. [[[brive<sub>v</sub>] $\phi$ <sub>stative v</sub>]<sub>ry</sub> <sub>N</sub>]

b. [[[translate<sub>v</sub>] $\phi$ <sub>stative v</sub>]<sub>tion</sub> <sub>N</sub>]





sky (1995) は、動詞の選択素性はその語の持つ意味素性によって決定されると仮定している。例えば、動詞 sleep の主語 Agent 項に、[inanimate] な項を採れないのは、その動詞の持つ意味素性によって、Agent 項が [animate] を取ることを要求するからであると考えられる。中間構文の潜在項に関する特性もこれと同様に、ゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  のもつ意味素性により導かれるものであると考える。具体的には、(34) で示したように、 $\phi_{\text{stative}}$  は Jackendoff (1990) で提案された行為層 (Action Tier) の Actor 項が [Arbitrary] なものであるという選択素性をすると仮定する。

- (34) ゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  は、その意味選択素性により、Actor 項が、  
[Arbitrary] な項を取ることを要求する。<sup>9</sup>

具体的に見てみよう。通常他動詞 open の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以下 LCS) は (35) である。

- (35) open : CAUSE ([Thing x ][GO ([Thing y], [TO OPEN])])]  
AFF [x][y]

一方、ゼロ派生接辞がついた open は、(34) より (36) の LCS を持つことになる。

- (36) open- $\phi_{\text{stative}}$  : CAUSE ([Thing  $\alpha$ ][GO ([Thing y], [TO OPEN])])]  
AFF [ARB]  $\alpha$  [y]

通常、行為層の Actor 項は主題層 (Thematic Tier) の Agent 項と結び付けられていることから、Agent 項も Arbitrary な解釈を受けることになる。従って、中間構文の暗黙項が常に動作主の意味を持つという特性も説明がつく。

Arbitrary な解釈を受ける要素には、音韻的に具現化されない要素と、具現化される要素の二通りある (cf. Cinque (1988))。前者は、統語論には投射されず (cf. Achemata and Schoorlemmer (1994))、(33 b) のようにその派生は収束する。しかし、音形を持った恣意的解釈を受ける名詞 (e. g. one, they など) が中間構文であらわれた場合 (37) で示したように、非文となる。これはなぜなのだろうか。意味の観点からは何の問題もないはずなので、(34) に対する反論になるかもしれない。

- (37) \*One [open- $\phi_{\text{stative}}$ -s]the door easily.

これは格照合の点から排除される。先に、ゼロ派生接辞は機能範疇を不活性にする特性があることを見た。故に(37)では、the door の格照合が行なわれず、派生が破綻してしまう。

(38) [Agrs' [TP [(AgrO') [VP one open- $\phi_{\text{stative}}$  the door easily]]]]

従って、(34)は以前として保持できる仮説であろう。

この(34)の仮説によって、状態動詞 (know など) が中間構文を形成しない、という事実に対しても説明が与えられる。

(39) a. \*This answer knows easily.

b. \*This article understands hard.

(Achema and Schoorlemmer 1994 : 74)

ゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  は、いかなる動詞にも付くことができることは、先に述べた。故に、状態動詞に付いても良いはずである。しかし実際は非文となる。これに対しては、Achema and Schoorlemmer (1994) に従い、状態動詞には行為層がないと考える。従って、ゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  が状態動詞に付いたとしても、Actor 項を [Arbitrary] なものにするとはできない。故に、状態動詞は中間構文が形成できないのである。

### 3.2 能格動詞のゼロ派生接辞

次に能格動詞について考察してみよう。1節で、能格動詞は中間動詞とは異なり出来事性を表す動詞であるということを見た。この動詞の持つ本質は、中間動詞と同様、ゼロ派生接辞によって引き起こされるものであると考える。能格動詞は、ゼロ派生接辞がついたものであると主張する間接的な証拠として(40)を挙げる。

(40) a. Taroo-ga kabin-o kowas-u.

b. Kabin-ga kowar-er-u.

日本語の能格動詞は、顕在的な形態素-er-を含んでいる。もし、これが言語普遍的な現象であると考えれば、英語の能格動詞にも対応する形態素が含まれていると考える事は妥当である。但し英語は日本語と異なり、それが顕在的に現れずゼロ派生接辞として現れるのである。ここでは便宜上、能格動詞のゼロ派生

接辞を  $\phi_{ergative}$  と表記することにする。このゼロ派生接辞によって、1節で見た出来事性動詞の持つ特性を示すのである。

ゼロ派生接辞  $\phi_{ergative}$  は、格素性に関して、 $\phi_{stative}$  と同じ特性 [+EN] を持つと仮定する。つまり、その接辞がつくことによって、(41)のように機能範疇 AgrO を格照合に関して不活性にし、(42)のような派生を行なう。

(41) break- $\phi_{ergative}$  : {AgrS, AgrO}

#

(42) a. The vase broke.

b. [<sub>AgrS</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>(AgrO)</sub> [<sub>VP</sub> break- $\phi_{ergative}$  the vase(nom) ] ] ] ]

すなわち、能格構文も、受動文や中間構文と同様の派生となる。

しかし、意味選択素性に関しては、 $\phi_{ergative}$  と中間動詞のゼロ派生接辞とは異なる。能格構文の潜在項は中間構文の場合と異なり、動作主として解釈されることはない。これは、ゼロ派生接辞  $\phi_{ergative}$  の意味選択素性は  $\phi_{stative}$  とは異なり、Actor 項が [Arbitrary] となることを要求しないためであると仮定する。具体的には、 $\phi_{ergative}$  は Actor 項が suppress されることを要求するのである (cf. Levin and Rappaport 1995 : 108)。<sup>10</sup>

### 3.3 受動文との平行性

本稿の分析により、中間構文と能格構文は、受動文と同様の派生をすることになる。3者とも、文法上の主語は論理上の目的語である。それが主語位置へ移動するのは、それぞれの動詞の持つ [+EN] 素性によって、機能範疇主要部が不活性になっているためである。

(43) a. [<sub>AgrS</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>(AgrO)</sub> [<sub>VP</sub> break-en the vase(nom) ] ] ] ] (Passive)

b. [<sub>AgrS</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>(AgrO)</sub> [<sub>VP</sub> break- $\phi_{stative}$  the vase(nom) ] ] ] ] (Middle)

c. [<sub>AgrS</sub> [<sub>TP</sub> [<sub>(AgrO)</sub> [<sub>VP</sub> break- $\phi_{eventive}$  the vase(nom) ] ] ] ] (Ergative)

また、同じ立場を取る Fujita (1993) の分析とは異なり、特別の機能範疇を規定する必要がない。能格構文も含めて同じ派生をするという分析は、Baker

(1988) の UTAH にも従う事になる。

(44) Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (Baker 1988)

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

ミニマリストの枠組みではD構造は廃止されているので、そのまま適用することはできないであろうが、レキシコンからの投射の際に何らかの主題役関係があると考えれば、この議論は有効であろう。

#### 4. 品詞転換とゼロ派生接辞について

本稿では、動詞にゼロ派生接辞が付加することにより、中間動詞あるいは能格動詞を形成するという提案をしてきた。最後に、品詞転換の際のゼロ派生接辞との関わりに付いてふれておく。

Marchand (1969) は、(45 b) の品詞転換は音韻上具現していない接辞を付加することによってなされたと提案している。

- (45) a.  $[\text{real}]_A + \text{-ize} \longrightarrow [\text{realize}]_V$   
 b.  $[\text{warm}]_A + \phi \longrightarrow [\text{warm}]_V$

(45 a) は、接尾辞 *-ize* が形容詞 *real* に付加したことにより、動詞 *realize* が派生したことを示している。同様に、(45 b) では、形容詞 *warm* にゼロ接尾辞が付加したことにより、動詞 *warm* が派生されたことを示している。動詞 *open* も、(46) で示したように、形容詞から動詞に品詞転換されたものであると考えられている。

- (46)  $[\text{open}]_A + \phi \longrightarrow [\text{open}]_V$

もしこれが正しいとすると、中間動詞や能格動詞を形成する際に、さらに  $\phi_{\text{stative}}$  や  $\phi_{\text{ergative}}$  を付加することは、(27) で示した Myers の一般化に反することになってしまう。

- (47)  $[[\text{open}]_A + \phi] + \phi_{\text{stative}}$

本稿では、品詞転換に関して Chomsky (1995) の立場を採用する。Chomsky

(1995 : 236, 382) は、Hale and Keyser (1993) が提案しているような、動詞 *shelve* が名詞 *shelf* からの派生によるものであるという立場をとらず、レキシコンの語彙記載項には、その語が持つ範疇素性が初めから記載されていると考えている。つまり、*open* の語彙記載項には範疇素性 [V] が記載されており、中間動詞 *open* +  $\phi_{\text{stative}}$  は、その動詞 *open* にゼロ形態素  $\phi_{\text{stative}}$  が付加したものであると考える。従って、Myers の一般化に反することはない。また、Pesetsky (1995 : 92) も、(48) で示したような強勢 (stress) の移動による動詞と名詞には、ゼロ形態素による派生が関わっていないと述べている。

(48) *abstráct*<sub>V</sub>-*ábstract*<sub>N</sub>, *compóund*<sub>V</sub>-*cómpound*<sub>N</sub>, *conduct*<sub>V</sub>-*cónduct*<sub>N</sub>  
*compréss*<sub>V</sub>-*cómpress*<sub>N</sub> (Pesetsky 1995 : 91)

この場合においても、動詞と名詞はそれぞれの範疇素性が記載されている独立した語であると考えられる。<sup>11</sup>

## 5. 結 語

本稿では、中間構文と能格構文についてゼロ派生接辞を用いた分析を提案した。具体的には、中間動詞は動詞にゼロ派生接辞  $\phi_{\text{stative}}$  がついた複合語であり、能格動詞はゼロ派生接辞  $\phi_{\text{ergative}}$  を含む複合語であって、そのゼロ派生接辞の担う特性によって両者の様々な特性の相違が導かれるのであるということを論じた。

## 注

- 1 Haegaeman (1991 : 310) に従い、能格動詞と非対格動詞を区別する。本論では後者については言及しない。
- 2 また、「知覚動詞+目的語+原形不定詞」の原形不定詞の位置には、(i)で示したように状態動詞は生起しない。この構文の原形不定詞は、特定の出来事あるいは特定の時間を記述するものでなければならないからだ。  
 (i) \*I saw the John resemble his father. (Fagan 1988 : 187)

この分布に関しても中間動詞と能格動詞は異なる。(ii)(i)で示したように、能格動詞は生起できるのに対し、中間動詞は生起できない。このこともまた、前者が出来事を表す動詞であるのに対し、後者が状態を表す動詞であると考えることによって、説明ができる。

(ii) I saw the plane land. (小学館英和中辞典)

(i) a. \*I saw bureaucrats bribe easily.

b. \*I saw the floor wax easily. (Keyser and Roeper 1984 : 386)

- 3 Fujita (1996) は、 $\theta$  基準により、この位置は義務的に飛ばさなければいけないと論じている。
- 4 中間構文に潜在的動作主項が存在しないという主張もあるが、それに対する議論については、Stroik(1992)、Hoekstra and Roberts(1993)、Matsumoto(1994)などを参照のこと。本稿でも中間構文は潜在的動作主項が存在するという立場をとる。
- 5 あくまでも状態性を示す特性を持つのであって、状態動詞と同じになるとは考えない。
- 6 Pesetsky (1995) は、中間動詞を形成するゼロ派生接辞として G を仮定している。しかし、この G は単に格付能力をなくし、外的  $\theta$  役割を吸収するだけであり、本論で論じている中間動詞の真の特性に関しては何らの役割も果たしていない。故に、ここで提案しているゼロ派生接辞  $\phi$  stativeの方が、より有効であると思われる。
- 7 Mizuno(1996)では、それぞれの機能範疇を Agr<sub>NOM</sub>、Agr<sub>ACC</sub>と表記している。本稿では説明の簡潔性のため、Agr<sub>S</sub>、Agr<sub>O</sub>と表記しておく。
- 8 副詞の位置に関しては、ここでの論議と直接関係がないので特に言及しない。
- 9 cf. Achema and Schoorlemmer (1994). 但し彼らは、中間構文形成の規則として、Actor=ARBを考えている。しかし、このような構文特有の規則を導入することは望ましいものではない。
- 10 但し、能格動詞に関してはさらに詳しい分析が必要であり、今後の研究課題としたい。
- 11 surprise などのように、ゼロ派生接辞が付くことによって品詞転換が起こったと考えるほうが適切な事例もある。しかし、少なくとも、中間動詞や能格動詞になる動詞に関しては、当てはまらないということが主張できれば十分であろう。

## References

- Achema, P. and M. Schoorlemmer (1994) "The Middle Construction and the Syntax-Semantics Interface," *Lingua* 93, 59-90.
- Achema, P. and M. Schoorlemmer (1995) "Middles and Nonmovement," *Linguistic Inquiry* 26, 173-197.
- Baker, M. (1988) *Incorporation ; A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, M, K. Johnson and I. Roberts (1989) "Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 219-252.
- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in Hale and Keyser eds., *The View from Building 20*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Cinque, G. (1988) "On Si Constructions and the Theory of Arb," *Linguistic Inquiry* 19, 521-582.
- Fagan, S. M. B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fujita, K. (1993) "Economy of Derivation and the English Middle," *The Proceedings of the 1993 Seoul International Conference on Generative Grammar*, 169-195.
- Fujita, K. (1996) "Double Objects, Causatives, and Derivational Economy," *Linguistic Inquiry* 27, 146-173.
- Hale, K. and S. J. Keyser (1987) "A View from the Middle," *Lexicon Project Working Papers* 10, Center for Cognitive Science, MIT, Cambridge, Mass.
- Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*, Blackwell, Oxford.
- Hoekstra, T. and I. Roberts (1993) "Middle Constructions in Dutch and English," in E. Reuland and W. Abraham eds., *Knowledge of Language Volume 2 : Lexical and Conceptual Structure*, 183-220, Kruwer, Dordrecht.
- Iwata, S. (1995) "The Distinctive Character of Psy-Verbs as Causatives," *Linguistic Analysis* 25, 95-120.
- Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions



- in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Levin, B. and M. Rappaport (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Marchand, H. (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation : A Synchronic-Diachronic Approach*, Beck'sche Verlagsbuchhandlung, Munchen.
- Matsumoto, M. (1994) "Implicit Arguments and Control in the Middle Construction," 英文学会誌 39, 85-98, 大阪教育大学.
- Mizuno, E. (1996) 『内在格の位置付けと間接受動文の歴史的発達について』 *Papers from the Thirteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 61-70.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax : Experiencers and Cascades*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Roberts, I. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Roeper, T. (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.
- Safir, K. (1986) "Implicit Arguments and Thematic Structures," *NELS* 16.
- Stroik, T. (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Williams, E. (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Reviews* 1, 81-114.

## Synopsis

## On Middles and Ergatives

This paper deals with the middle construction and the ergative construction in English, as in (1) and (2) respectively.

- (1) This cup breaks easily.  
 (2) This cup broke.

The focus of the previous analyses was the (in) transitivity of both constructions. For instance, Keyser and Roeper (1984) argue that middles are syntactically transitive, while ergatives are intransitive; Fagan (1988) argues that both constructions are syntactically intransitive.

I suggest that both constructions are syntactically transitive: in middles and ergatives, as well as in passives, the object moves to the subject position overtly.

- (3) a. [e] breaks this cup easily. (Middles)  
 b. [e] broke this cup. (Ergatives)  
 c. [e] was broken this cup. (Passives)

Following Fagan (1988), I suggest that the syntactic differences between middles and ergatives are not due to the (in) transitivity of both constructions but due to the semantically different property between them. For example, middles are different from ergatives as for *Out* Prefixation, which creates transitives from intransitives.

- (4) a. The basketball outbounced the baseball.  
 b. \*Bureaucrats outbribe managers easily.

(Keyser and Roeper 1984)

Keyser and Roeper (1984) argue that this is because ergatives are intransitive and middles are not. This is not the case, however. Stative verbs cannot undergo *Out* Prefixation, even if they are intransitive.

- (5) \*John outbelieves everyone.

The Example (4) shows that middles are stative, not transitive. I propose that the middle verb and the ergative verb include the zero morphemes (i. e.  $\emptyset$  stative and  $\emptyset$  ergative, respectively), which bring each semantic property.

- (6) a. The cup break- $\emptyset$  stative-s easily.

b. The cup broke- $\emptyset$  ergative.

The evidence for zero morphemes of middle verbs are the unacceptability of nominalizations of middles, as in (7).

(7) \*the bureaucrats' easy bribery (Pesetsky 1995)

The unacceptability of this form follows straightforwardly if this nominalizes a verb whose head is a zero affix, in violation of Myers's (1984) Generalization.

I assume that the zero morphemes  $\emptyset$  stative and  $\emptyset$  ergative have the same feature as the passive morpheme *-en* in respect to the Case feature: all of them have the property that makes the functional category (AgrO) inert in the lexicon (cf. Mizuno 1996). The object must move to the subject position, as illustrated in (3), for Case to be checked.

In middles, there is an implicit subject interpreted as Agent. I propose that zero morphemes play an important role for this. Chomsky (1995) notes that selectional features are determined by semantic properties of verbs. That is, the verb *sleep* requires its subject role to be [Animate] by its semantic properties. The same holds of zero morphemes. In middles semantic properties of zero morphemes require Actor in Action Tier (cf. Jackendoff 1990), which is the subject role, to be [Arbitrary]. Actor in Action Tier is linked to Agent in Thematic Tier, so that there is an implicit subject interpreted as Agent in middles.